

富士山麓の“赤い引揚者”

中

―開拓と対オウムの闘いで地域リーダーに―

ノンフィクション作家

三山 喬

でした。当時の日本兵はとにかく臍抜けた状態で、口を開けば日本にいつ帰れるか、そして食い物の話、それしかありませんでした」

満蒙開拓青少年義勇軍

山梨県富士河口湖町にある戦後開拓地・富士ヶ嶺地区（旧・上九一色村）に住む竹内精一（九十五歳）は、そんなふうに淡々とシベリア時代を回想した。「終戦の日」の五日前、旧満州にいて十七歳で招集され、八月十九日の停戦までソ連軍と戦った。そしてこの十日足らずの「軍歴」があるがために、その後シベリアに四年間抑留され、強制労働の日々を送った。

「我々が捕虜として送られたのは、シベリアの第十九地区。ライチヒンスクという炭鉱町でした。この地区の第一分所という施設には、（旧・日本軍の）第四軍がほぼそのまま、約一万人もの人数が収容されました。建設作業をする班もありましたが、中心は炭鉱での仕事。ただ同じ炭鉱でもここは露天掘りなので、たとえば鉄道建設に従事した抑留者に比べたら、それほど過酷な重労働じゃない。栄養失調で亡くなる人もいましたが、犠牲者は他の収容所より少なかったと思います（本格的な）労働が始まるのは、昭和二十一（一九四六）年になってから。二十年九月十八日に満州を出てソ連に移送されるまで、孫呉という（日本軍の）陣地に収容され、シベリアでもしばらくは労働のない捕虜生活

前回少し触れたように、彼がそもそも満州に渡ったのは、十四歳のとき山梨から満蒙開拓青少年義勇軍に応募したためだ。当人からの私の聞き取りでは、シベリア時代と引き揚げ後に焦点を当てたため、義勇軍の詳細は聞けていないのだが、シベリア抑留者支援・記録センターの協力で、和歌山県に住む高齢のシベリア引揚者に、やはり満蒙開拓青少年義勇軍出身者がいたという情報を得た。

二〇二〇年六月六日付『毎日新聞』地方版記事で、当時九十二歳となる橋本市の阪口繁昭という人が「六十歳のころから（戦争体験の）講演を始め、小中学校、高校、集会所などで話してきた」と紹介されている。残念なことにこの記事が出た四カ月後、阪口は他界してしまっただが、その「語り部」の活動を支えてきた地元元教員・池永恵司から、生前の講演動画を借りることができた。

「凍結のシベリアでの抑留生活」。そう題した地元での講演（一八年七月）によれば、阪口は竹内とまったく同じ昭和十八年、十四歳のとき満蒙開拓青少年義勇軍に入っている。

竹内の場合は、茨城県の内原訓練所に一泊し、すぐ

さま満州の満鉄二井訓練所に向かったと自著『オウム2000日戦争―富士山麓の戦い』に書かれている。一方の阪口は、内原訓練所で約一年、訓練を受けたあと、ハルビンの義勇軍本部に移動したという。「（内原訓練所で）びっくりしたのは、『食糧増産のため』と言われて入ったのに、農業の訓練が一切なかったこと。精神教育や軍事教練、銃器の扱い、手旗信号、馬の扱い、そういうことばかりでした」

ソ連から軍事組織と誤解されぬよう、組織名は途中、「青少年義勇軍」から「青年義勇隊」に変更されている。それでもハルビンで命じられたのは、ソ連国境の町・東寧での国境警備だった。ここでも軍事訓練を日々受け続けた。

黒竜江を越え、ソ連軍の侵攻が始まったのは昭和二十年八月九日。阪口によれば夜半のうちに「カタカタと戦車の走る音が聞こえ、やがて南方からドカインドカインという（爆発）音が聞こえた」という。

夜が明けると、孫呉という土地にある師団本部から「東寧を死守せよ」という命令が伝えられ、同時に阪口は陸軍二等兵として正式に兵士に任ぜられた。二十三日の部隊降伏まで二週間ほどの戦闘体験だが、上官